

令和元年度とくしま政策研究センター調査研究

にし阿波エシカル未来創造大学

～にし阿波のエシカル文化を未来へ、そして世界へ～

徳島県西部総合県民局

1 背景および目的

にし阿波地域では、世界農業遺産にも認定された「傾斜地農耕システム」により、山の斜面を崩さず、環境に適応しながら農作物を生産し、作ったものは地域で消費するという生産・消費形態が、SDGs が採択されるより遙かに前から連綿と営まれている。このような、自然に寄り添って生きる昔ながらの暮らしは、「エシカル」の視点で大変価値あるものであり、貧困や環境問題、食糧危機などの問題を抱える私たちにとって、将来への方向性を指し示すものとなり得る。

しかし、高齢化・人口減少等を背景とした農業の後継者不足という全国的な課題に、本地域も直面しており、地域の活性化を通じて古来からの生産・消費形態をどうやって未来につないでいくのか、その方策を見いだすことは地域にとって喫緊の課題である。

本調査研究により地域の生活が有する価値を洗い出すとともに、持続可能な農業・生活の維持・拡大に向けた政策形成につなげる。

2 研究内容

2-1 「にし阿波エシカル未来創造大学」の開催

2-1-1 開催内容

徳島県農業大学校の学生や地元の高校生等の県内外の学生を対象に、「にし阿波エシカル未来創造大学」を開催した。地元農家も交え、地域農業のおもしろさについて語るとともに、エシカルの視点から「傾斜地農耕システム」を、次世代に継承するための方策を探った。

日時：令和元年12月1日（日）13：00～15：00

講演会：＜演題＞エシカルの視点から世界農業遺産を見る

＜講師＞京都大学大学院 農学研究科

生物資源経済学専攻 農学原論分野 大石 和男 助教

意見交換会：＜テーマ＞「にし阿波傾斜地農耕システムのおもしろさを共有する」

出席者：徳島県立農業大学校 3名

徳島県立池田高等学校 2名

高知大学農林海洋科学部 6名

立教大学 2名

地域農家 7名

2-1-2 開催結果

① 「傾斜地農耕システムの第一印象について」

（学生からの意見）

- ・平地で農業をするのも大変なのに、急傾斜地だともっと大変だと思う。太陽の光があたるのが、短そう。
- ・人口が少なくなっても仕方ない土地だ。

② 「傾斜地での農業や暮らしについて」

（農家からの意見）

- ・かやのすき込みや、こえぐろを作成する作業が一番大変。
- ・労力不足が一番困る。70歳が一番若い。若い人に作業してもらいたい。
- ・思っていた以上に傾斜地で、初めて訪れた人は大抵こける。
- ・小中学生など教育旅行生が多い。傾斜地をみると、小中学生は驚く。
- ・前は、学生が来てくれるとは思ってもみななかったが、試しに、中学生の農作業体験を受け入れた。今では進んで来てくれている。
- ・この地域で農業をするのは大変だけれども、楽しむことを忘れずに、農作業をして

いる。

- ・生活そのもの（朝起きて寝るまで）が世界農業遺産。生活して、みんなにその価値を気づいてほしい。
- ・間伐を利用し、割り箸を作っている。ここでの農業は障がい者の人も社会に参加できる。山で生きる価値観を感じてほしい。

③ 「地域農家の話を聞いてみての感想」

(学生からの意見)

- ・傾斜地ではカヤをすきこんで農業をしており、地域全体で協力しながら農業をするのが楽しそう。
- ・機械が使えないなど、不利なことばかりだと思っていた。でも不利だからこそその工夫がすばらしいと思った。
- ・地域の人と話ができるのだったら、大学生は来ると思う。棚田の作業でもきついで、傾斜地での作業を体験してみたいと思った。
- ・少量多品目を栽培しているので、自給自足ができると思った。
- ・きびを使ったおもちがおいしかった。

④ 「これからの政策は？」

(学生及び地域農家からの意見)

- ・まずは、にし阿波に来てもらい、とにかく楽しんでもらうことが大切。にし阿波＝生活と生産が一体であり、にし阿波で生活し「生きている」ということを実感してほしい。
- ・教育が大切。インターネットで学校の教育を受け入れる。

2-1-3 開催成果

この地域の農業や生活への第一印象を聞くと、学生からは「条件の不利な地域での農業は、大変そうだ。」など、マイナスの印象を挙げる意見も多かった。しかし、地域農家から、もちろん農作業の大変さに対する話もあったが、農業や暮らしの知恵やこの地域で生きる楽しさについて説明してもらった。そういった話を聞き、学生からは「地域全体が協力して農業をする楽しさ」や「条件は不利でも工夫する農業が素晴らしい」等、傾斜地農耕システムのエシカル的な価値に気づいているようだった。また、大石先生からは、「エシカルは楽しくて、おいしい」とまとめていただいた。

特に、興味深かったのが、農家自身は傾斜地農耕システムの価値や魅力に気づいていなかったが、外部からの教育旅行生が農作業体験をする感想を聞いて、この地域のエシカル的な価値を再認識していることだ。



講演会の様子



意見交換会の様子



会場の様子

2-2 とくしま政策研究センター（調査研究）委託業務（聞き取り調査）

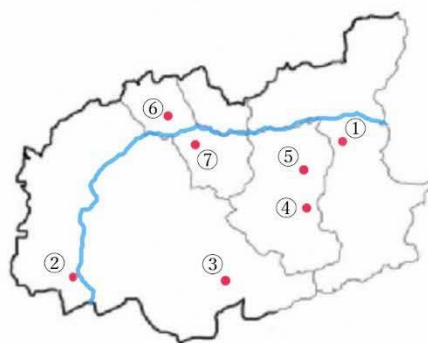
傾斜地農耕システムが現在まで継承されてきた理由を、外部者の視点から明らかにしつつ、そこに内在する潜在的な価値について探るため、京都大学と委託契約を締結し、現地調査は、大学院農学研究科 助教 大石 和男氏及び修士課程 岩男望氏が行った。以下の文書については、両名から提出された研究成果報告書の抜粋である。標記の報告書については、添付する。

2-2-1 調査対象

(1) 表1 調査対象一覧

対象地域・集落		対象者	性別	年代（年齢）	調査日
美馬市	淵名集落	A	男性	70代	12/6,7
	(下図①)	B	男性	80代	12/7
三好市	上名集落	C	女性	90代	9/26
	東祖谷地域	D	女性	80代	9/27
		E	男性	80代	9/27,10/26
		F	男性	60代	9/27,10/26
	G	男性	70代	9/27	
つるぎ町	剪字集落	H	男性	—	9/27
	猿飼集落	I	男性	70代・70代	9/30,10/27
	(下図⑤)				

東みよし町	ハタ・法市集 落 (下図⑥)	J	男性	70代	9/26,11/10
		K	女性	80代	9/26
		L	女性	—	9/26
		M	男性	80代	9/26,11/10
	加茂山地域 (下図⑦)	N	男性	—	9/28
		O	男性	70代	9/28



(2) 図1 訪問集落の位置

2-2-2 調査スケジュール

令和元年9月9～11日、9月25～30日、10月25～27日、11月8～10日、11月30～12月1日、
12月6～8日
計6回

2-2-3 調査項目

○農作物について

- ・ 作目（雑穀、主食作物、換金作物、地域の固有種等）

○傾斜地における農耕のシステムについて

- ・ 畑の使い方（多品目の栽培、輪作等）
- ・ カヤの利用（カヤ場の位置、カヤの運び方、コエグロ）
- ・ 肥料、農薬
- ・ 道具、機械
- ・ 労働（手間替え）

○食生活について

- ・ 食品加工
- ・ 保存食、伝統食
- ・ 食品の入手手段

○その他の生業について

2-2-4 調査結果

2-2-4-1 小括

(農作物・雑穀)

地域によっては焼畑で栽培されており、焼畑のなくなった現在でも、特にソバについては多くの農家が自家採種を続けている。その他の雑穀については、米が入手できるようになったことや獣害のために栽培をやめてしまった農家も多いが、その代わりに現在では、祖谷雑穀生産組合が昔からの貴重な遺伝資源を保存する役割を担っている。

(農作物・葉タバコ)

江戸時代に広まった阿波葉は換金作物として、その全盛期にはほとんどの農家で栽培され、生計を支えてきた。重労働であること、大量の肥料が必要であること、収入を得るのが収納の時だけであることなどのマイナス要素もとはいえ、買い取り価格の安定のために葉タバコは地域に受け入れられてきたのである。

やがて専売公社の民営化に伴って栽培が衰退したことと就業機会の増加により、葉タバコだけでなく農業そのものからも離れる人が増えていった。それでも兼業や作目の転換などを行いながら農業を続けてきた者も多く、そういった人々の手によって今日みられる農耕システムが残されてきたのである。

(農作物・その他)

傾斜地農耕システムにおいては、限られた土地を有効に使わなくてはならない。そのため、主食作物や換金作物を中心にして畑を利用すること、多毛作を行うこと、効率よく作物の入れ替えをするために畝間を広くとること、そしてにし阿波傾斜地農耕システムの特徴にもなっている少量多品目栽培を行うこと等の工夫がなされてきた。そのような工夫の一部は現在も残り続けている。

(カヤの利用)

さらに特徴的なのはカヤの利用である。多くの農家がカヤの利用は有効であると強く感じており、化学肥料が利用可能であるにも関わらず、現在でもカヤを刈り乾燥させ畑に入れる農法を実践している。人口減少や高齢化に伴い、カヤ場（採草地）の場所が山場から耕作放棄地に移り、カヤを運ぶ際に機械が使用されるようになり、コエグロの作り方や畑への投入法が変わるなどの変化はあるものの、カヤの利用そのものは現在でも傾斜地農耕システムに欠かせないものとして認識されている。

(道具)

道具については多くの場所で伝統的な農具が使い続けられているが、農具のメンテナンスを行う野鍛冶がにし阿波で1人だけになってしまったために、その存続が危惧され

ている。また、高齢になり昔と同じ農具を使用し続けることに困難さを感じている人もいる。

（手間替え）

労働交換である手間替えについては、かつては様々な場面で行われてきたが、現在はあまり行われなくなっている。人手のいる作業は親戚・近隣住民が手伝うほか、雇用をいれたり、イベント形式でおこなったりするようになっている。

（食生活）

食生活については、かつて家庭でされていた豆腐・味噌・醤油・コンニャク作りを、現在ではやめている場合が多い。かつては自給用であった干し芋等の加工品や保存食は、現在では販売されるようになり、伝統食についても同様に商品化がなされ、地域外の人をも対象にするようになったことで、その意味合いが変化している。食品の物々交換を行っていた商店や商売人は、今ではみられなくなった。

（牛の飼育）

その他の生業では、多くの家で牛の飼育がなされていた。牛は農耕だけでなく堆肥作りの面からも重要な存在であった。乳牛を飼育し牛乳を出荷していた地域もあったが、いずれの場合も牛の飼育は現在行われなくなっている。また、農業を行うかたわら出稼ぎに行くという形態も一般的であった。出稼ぎの先は幅広く、仕事内容も様々であり、葉タバコ等の農作業のオフシーズンに外へ働きに行く形式が多かったが、次第に農業以外の就業機会が増加したことで、出稼ぎから農外就労へと変化していった。

2-2-4-2 考察

これまで述べてきたように、「にし阿波傾斜地農耕システム」の現在の状況は、古い時代からの伝統的なやり方がそっくりそのまま維持されてきたのではなく、戦後日本の激しい時代変化を背景にしながら、地元住民による生計を維持するための取り組みの積み重ねによって出来上がってきたことが明らかとなった。とりわけ昭和中期までの葉タバコ栽培は、この地域の農業経営にとって大きな地位を占めており、そこでの肥料多投型の農法や中央集権的な販売管理体制は、伝統的かつ自律的な地域農業の姿とは異質な形態であった点は重要である。そしてこの葉タバコ栽培が専売公社の民営化によって退行することで、結果的に現在のスタイルが生まれることになった。

したがって、やや無遠慮な表現を許してもらえば、この地域の農耕システムは、「残そうとして残してきた」というよりも、「たまたま（このような形で）残った」という側面が強い。ただしこのことは、決して否定的に捉えられるべきではないと本研究では考える。

聞き取りを行ったある人物から「この場所は世界農業遺産なのか？」と逆に尋ねられたことに示されているように、地元住民の世界農業遺産に対する理解度や熱意には、人によって温度差があることも確かである。自分達の農業スタイルをありふれたものとして捉えてしまうことで、そこに特別な意義があることに気付いていない人々も少なからず存在するようである。

これに対して、にし阿波に大いなる価値と可能性を見いだしているのはむしろ地域外の者である。たとえばFAOで世界農業遺産の審査に携わっているあん・まくどなるど氏は、徳島での講演において、「にし阿波傾斜地農耕システム」について「一流の農業遺産」「非常に貴重な農法システム」とであると褒め称えている（2018年5月12日）。彼女はその理由をはっきりとは明言していないものの、講演で登場した「環境保全型農業」や「生物多様性」といったキーワードから伺えることは、にし阿波で実践されている農法が、持続性、物質循環、生態系、環境負荷といった点で、世界レベルの高い意義をもっているという事実である。これを本研究の関心に沿って表現するならば、エシカル性の高い生業・生活体系が保全されていると言い換えることもできよう。たとえばコエグロの利用を中心に据えた栽培体系は低投入・資源循環型農法のお手本と言って良く、後世に残すべき価値を高く認めることができる。にし阿波では、葉タバコ栽培の退場によって結果的に環境保全型の農耕システムが形成され（残され）、その結果として現在、エシカルな未来社会を先導する可能性を手にしつつあるのである。

したがって今後に必要なことは、まずにし阿波の農耕システムに内在するエシカルの要素を、コエグロ以外の事例についても詳細に解明していくことであり、次にこれらがにし阿波を超えてグローバルな価値を持つという事実を住民に理解してもらうことである。この2点をうまく噛み合わせることによって、現行の農耕システムを積極的に維持しようとする機運を住民の間に生み出し、外部からのサポート活動と呼び込む力へと

繋がっていくものと思われる。にし阿波傾斜地農耕システムを「守る」という姿勢ではなく、「価値を掘り起こす」「価値に気づく」「価値をシェアする」という姿勢こそが重要となろう。



雑穀 (左) とソバ (右)



畝間にカヤを敷く



聞き取り調査の様子

3 今後の方針

にし阿波地域の傾斜地農耕システムは、持続性、物質循環、生態系、環境負荷といった点で、エシカル的に価値のある農業及び生活が現代まで継承されてきた。

今回の調査研究では、地域住民の傾斜地農耕システムのエシカル的な価値や継承への熱意には温度差があることがわかった。

今後は、にし阿波の傾斜地農耕システムに内在するエシカル的要素を詳細に解明していき、次にこれらが世界的な価値を持つという事実を地域住民に理解してもらうことが必要である。

また、世界農業遺産の審査に携わっているあん・まくどなるど氏や県内外の学生もこの地域のエシカル的な価値に気づいていた。外部者からの視点は、この地域のエシカル的な価値と可能性を見いだすことにつながる。

この両者をうまく組み合わせ、現行の農耕システムを積極的に維持しようとする機運を住民の間に生み出したい。西部総合県民局としては、両者が交流する意見交換会等のイベントを開催し、地域住民の傾斜地農耕システムのエシカル的な価値への理解を進めるとともに、外部からのサポートを組み合わせ、持続可能な農業・生活の維持・拡大に向けた政策形成につなげていきたい。加えて、今年度は傾斜地農耕システムが現在まで残ってきた歴史的背景を調査したが、今後は、現在まで残ってきた経緯を踏まえ、後世に継承するための方策を探っていく。

にし阿波傾斜地農耕システムの次世代継承の方策について探る —伝統的農法の存続過程に探る潜在的価値—

京都大学大学院農学研究科

助教 大石和男

修士課程 岩男望

1. はじめに

世界農業遺産では5年ごとの保全計画(アクションプラン)の作成と実施が義務づけられており、「にし阿波の傾斜地農耕システム」でも5つの柱からなる課題が抽出されている。そしてこれらに対応する形で、地域住民は社会・文化・経済活動を、公共団体などは管理・支援活動を、それぞれ担当することとなっており、いずれも日常のかつ具体的なレベルで現在取り組みが進められているところである。それに加えて保全計画では「外部サポート活用」という方針も掲げられており、本研究はその内容を押し進めるための一助として立案されている。

では「外部サポート」を呼び込むために必要な作業とは一体何であろうか。本研究が考えるその内容は、にし阿波地域がもつ魅力について、今日の時代状況を意識しながら考えてみることである。一昔前であれば地方に来訪者を呼び込むための有効手段はハード整備であるとされたが、その典型例であるリゾート開発は今やすっかり鳴りを潜め、都市住民や若者は「農村らしさ」に目を向けながら、ありのままの農山村の姿を肯定的に評価するようになってきている。たとえば都会において環境負荷の少ないライフスタイルが模索され、これが農山村への移住に向けた動きを後押ししていることは、「外部サポート」の導入を考える上で十分に踏まえておかねばならない前提条件のひとつと言えよう。

したがって外部者がにし阿波を積極的にサポートしたくなる雰囲気を作っていくためには、農山村が保有している潜在能力を、現代的な価値観に基づきながら的確に把握し、その良さを都市地域や若者に対して示していくことが求められる。たとえばその一つの鍵となるのが、SDGsに代表される倫理(もしくはエシカル)である。徳島県ではエシカル消費という観点に着目して政策を進めてきたが、本来この倫理という観点は消費行動のみならず、生産や生活のあり方を広く問い直すとする際に用いられる用語である。その意味において世界農業遺産であるにし阿波の農林業を中心とした生活と生業のあり方には、エシカルの要素が多分に含まれていることが予想できる。

そこで本研究では、未来指向の価値観に沿った魅力が、にし阿波に潜在的に存在しているとの仮説をたてる。そしてその内容解明の第一段階として、<世界農業遺産の認定地にて営まれている農耕システムが、戦後の激しい社会変化の中でどのように維持・形成されてきたのか>を明らかにすることを目的とする。そしてこれを将来的にエシカル研究へと発展させていく際の手がかりとなすことを目指す。

2. 調査内容

(1) 調査対象

表1 調査対象一覧

対象地域・集落		対象者	性別	年代(年齢)	調査日
美馬市	湊名集落 (下図①)	A	男性	70代	12/6,7
		B	男性	80代	12/7
三好市	上名集落 (下図②)	C	女性	90代	9/26
	東祖谷地域 (下図③)	D	女性	80代	9/27
		E	男性	80代	9/27,10/26
		F	男性	60代	9/27,10/26
つるぎ町	剪宇集落 (下図④)	G	男性	70代	9/27
	猿飼集落 (下図⑤)	H	男性	—	9/27
東みよし町	ハタ・法市集落 (下図⑥)	I	男性	70代・70代	9/30,10/27
		J	男性	70代	9/26,11/10
		K	女性	80代	9/26
		L	女性	—	9/26
	加茂山地域 (下図⑦)	M	男性	80代	9/26,11/10
		N	男性	—	9/28
		O	男性	70代	9/28

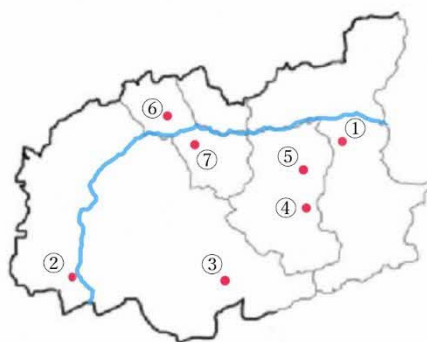


図1 訪問集落の位置(筆者作成)

(2) 調査スケジュール

大石和男：令和元年9～11日、11月30～12月1日（エシカル未来創造大学を含む）の計2回
岩男望：令和元年9月25～30日、10月25～27日、11月8～10日、12月6～8日の計4回

にわたって現地を訪問し、調査を行った。

(3) 調査項目

- 農作物について
 - ・作目（雑穀、主食作物、換金作物、地域の固有種等）
- 傾斜地における農耕のシステムについて
 - ・畑の使い方（多品目の栽培、輪作等）
 - ・カヤの利用（カヤ場の位置、カヤの運び方、コエグロ）
 - ・肥料、農薬
 - ・道具、機械
 - ・労働（手間替え）
- 食生活について
 - ・食品加工
 - ・保存食、伝統食
 - ・食品の入手手段
- その他の生業について

以上の質問項目に沿って、昔と現在の状況について聞き取りを行った。時間は1～2時間程度で、許可を得た場合はICレコーダーで録音した。

3. 調査結果

(1) 農作物について

1) 雑穀

聞き取り対象者のほぼ全員が雑穀を栽培していた。聞き取り中、各品種は以下の人物の語りに登場した。

アワ：C、D、F、G、O、N コキビ：B、C、D、F、K、M、O
タカキビ：C、D、G、M、N ヒエ：D ヤツマタ：D

食べ方としては、米に混ぜるか、モチにすることが多かった。

米の栽培が困難な地域であるため、雑穀は米の代わりの主食または主食を支えるものという位置づけで、必ずしも肯定的なとらえ方がされていたわけではなかった。

「このへん田んぼがないけん、白いおもちは食べられんかったけんな。」(C)

「こんなん（雑穀）で大きくなったんです。米はめったに食べられなかった。」(Dさんの妻)

家で食べる分としての栽培がほとんどであったが、販売していたという人もいた。

現在、調査対象者の中では、Bさんがコキビの栽培を続けているほか、ソバの栽培も多くの農家で続けられている。

また、東祖谷では雑穀の生産が一度ほぼ途切れたが、世界農業遺産認定を前に固有種がなくなってしまうことに危機感を抱いた人々によって祖谷雑穀生産組合が3年前に組織され、現在は種の保存を目的とした栽培が行われている。

「だんだん種ぎれになりかかっとなけん、これはいかんぞということで。(雑穀) 食べたいから作りよるわけではないんだけどな、昔の伝統を継ぐって感じなんよ。」(D)

そして祖谷雑穀生産組合に限らず、現在も個々の農家が在来種の栽培を続けており、種の保存の役割を担っている。

「ソバはもう先祖代々から。もう、ずーっとソバは。麦とか雑穀も昔からもう、先祖代々から作りよった。」(M)

「昔ほどではないけど、在来種の種残ってる。雑穀、豆類も、ソバ、キュウリも」(A)

「自分くのうちで取る場合もあるし、種もの屋や農協で、買う（場合もある）。苗も、種を買ってきて自分で作ったりな。」(H)



写真 1,2 来年蒔くためにとってある雑穀（左）とソバ（右）

また、雑穀の栽培について特徴的であったのが、焼畑の存在である。

家に近い畑では換金作物や主食となる麦等が優先して栽培され、離れた焼畑で雑穀が栽培されていた。ソバ、豆類も焼畑で栽培された。聞き取り対象では、東祖谷で焼畑が行われており、雑穀を栽培した後は数年でミツマタ栽培に移行、その後造林という流れが一般的であった。焼畑を行わない地域では、昔から通常の畑で栽培していた。

「焼畑で作ったらうまいんで。灰もあるし初めて作るけん。」(G)

「普通の畑は換金作物みたいな、野菜とか作らないかん。」(D)

「もったいないきん、雑穀みたいなのは家から離れた遠くで山焼いてしよった。」(D)

米を買うことができるようになったこと、他の作物に専念するようになったことなどから、昭和40～50年頃を境に焼畑は行われなくなっていった。

「焼畑は昭和50年頃にやめた。(拡大造林で) スギの木が多くなって。

それとな、ご飯がな、安く入るようになった。」(D)

「やっぱりタバコの方に(専念するから)。ようせんようになったな。」(F)

現在は、栽培する意欲はあっても鹿やカラス等の獣害で断念する場合もある。

「コキビは美味しいんじゃけどなあ。」(C)

「カラスの害で、人間(の口)に入らんくなってやめた。」(K)

また、ソバについては、栽培期間が短いため(8月～10、11月) お金になるのが早いと評価されていた。かつては物々交換の手段としても使われた。現在も栽培している農家はJAに出荷するほか、地域のイベントで使う等、昔とは異なる形で消費している。

「ソバは期間短くてお金になるのが早いから」(J)

「(珍しくないから) 売れんのでよ。どっちかっていうと、牛とか、馬とかそんなんにやりよった。」(F)

「ソバは地域のグループで売って、年越しソバやイベントに使いよる。」(G)

2) 主食

米の生産が困難であったこと、生産できても量が少なかったことから、主食は麦や雑穀で、そこに米を混ぜる形が一般的であった。副食としてイモも食された。

時代や地域によって混ぜる割合は異なるが、全体として、米の収量が増加していったこと、および米が購入できるようになったことによって米の混合割合が増えていき、やがて完全な白米食となった。麦は、はじめは丸麦であったが次第に平麦へと変わっていった。麦は自家消費や物々交換の対象とされたほか、販売されることもあった。

「裸麦が主食、ヒエも入れたり」(F)

「米と麦、半々ぐらい。昔の米は反収ようけとれんきに米だけでは足りん。」(G)

「麦、芋。裸麦な。その次はちょっと米を入れよったの。」(H)

「麦と雑穀。7割から8割までが麦だった。」(M)

「9割が麦であと1割が米。米も今のように収穫量が多くない。」(O)

ほとんど米が作れなかった地域もあるが、平らな土地がわずかでもある場合には田んぼをひらいて稲作を行った。収量は少なく、また、収穫した米は正月などにとっておき、普段の生活では麦を混ぜて食べていた。

「田んぼもあったけど（普段は）米は食わしてくれん。」(F)

「つるぎ町でお米作ったところは少ない。昔は水があるところは小さくてもどうにかして作りよった。」(I)

麦や雑穀、米は殻をとる（搗く）ことも家ごとに行っていたため、収穫後も手間がかかった。

「遠くまで負うて水車（水車を動力として臼で搗く）まで持っていかないかん。」(F)

「自分のうちで臼で精米をした」(M)

白米が食べられない時代、お弁当は麦飯であった。芋やトウモロコシ等もお弁当になった。

「芋、トウモロコシ、モチもお弁当としていた」(A)

「お弁当はちょっと米をいれとったな。お金持ちの家はお米。うちは麦飯やけん隠して食べて。」(H)

麦と米を混ぜていた時代、お弁当だけは白米だったという場合もあった。

「湯飲みに一杯分のお米を小さい鍋で炊いて、お弁当には白いご飯を持たせた。」(C)

「弁当にだけは米入れてくれた。麦の中に米を入れて炊いて、米のとこだけ弁当に入れてくれた。」(F)

白米が普段から食べられるようになったのは、現金収入を得て米を買えるようになった昭和40～

50年代である。条件の悪い田んぼはその後に減っていった。

「阿波葉でお金が入るようになって作るのをやめた。標高高いけんな、(米が) あんまり美味しくないから。」(F)

3) 葉タバコ

聞き取りした全員が葉タバコ（阿波葉）の栽培に言及した。

阿波葉は在来種で、約400年前の江戸時代初期に栽培が始まり、県西部の山間部に広まった。

「藩政時代、阿波の物産について、野に藍、海に塩に対して、山にタバコと紙と言われ、三好・美馬は昔から、タバコ作をもって生活を支えて来たという。」(『阿波池田タバコ史』p.21)

山間部では阿波葉の他には換金作物がなかったこともあり、最盛期にはほぼすべての農家が栽培していた。

「芋作りがなくなって現金収入がないけん、お金になるゆうたらタバコぐらいで」(C)

「ミツマタかタバコぐらいで他に現金収入がないから作ってた。」(F)

「タバコの他に換金作物ゆうてここらはなかった。」(N)

「収入になるんよタバコは。昔はそれで学校へもやったりしたけんな。」(I)

「生活に苦労はなかった、タバコで。」(M)

生計を支える作物であったため、当時は阿波葉を畑の大部分で、しかも条件のよい場所で優先的に栽培し、残りの畑で他のものを作るという、阿波葉中心の農業形態となっていた。

「よう土が肥えて、よう作できるところへはタバコ植えたんですよ。一番はタバコ。」(F)



写真3,4 阿波葉の乾燥の様子（Iさんの家）

栽培～出荷は重労働で手間と時間がかかり、子どもたちも作業を手伝っていた。専売公社から指定された肥料や資材、専売所役員の接待等の出費のために、家によっては作っても労働の割には採算の低い状況であった。また、収入が1年に1回のみであるという点もマイナス要素になっていた。

「朝も、早うからせなかつたら作業でけんし、夜やは何時になるか分からんでな。」(F)
「ヤニがつくんで手が黒うになるんよ、着物じゃって別にしとかなんだら、汚れてしまうんよ。ほなきにええ服は着ていくことないんよ。」(I)
「子どもの夏休みはその手伝いばかり。ほかの衆は遊びに行くけど、それどこじやない。」(J)
「『タバコ作ったら貧乏する、ミツマタ作ったら長者になる』、そういうことわざがあった。」(E)

他の換金作物である野菜は価格が安定しなかったため、労働に見合わないとしても必ず決まった価格で買い取ってもらえる阿波葉栽培を行う方がいいという認識がもたれていた。また、ヤミで売ることによって収入を得る場合もあったという。

「タバコをヤミにな、ちいと売ったら電気ついた。」
「コエグロにタバコ持って行って隠して」
「おまわりさんじゃっての、買うてのめんけん、『ちょっと巻いてくれ』っての。」
(H)

葉タバコは専売制であり、地域の代表（総代）を通した栽培方法の指導も行われたが、個人の技術や土地の条件も大きく影響し、収穫した葉の等級の違い、ひいては収入の違いにつながっていた。

「品質や数量を決めるのは日当たりの具合、乾燥の具合の管理。技術もいる。家によって、1反あたり10～15万円の差が出ることも」(A)
「みんなそれぞれやり方も違う。葉もやらん人はやらんし。上手にするし（＝上手にする人は上手に。）」(F)
「タバコも色ええのせなつたら（良い色の葉を出荷しなかつたら）、安いな。それがなかなかきれいにならん。」(F)

昭和40～50年には阿波葉から黄色種への転換が起こった。

「池田出張所管内で黄色種が作られはじめたのは昭和二五年（専売公社池田出張所調）のことである。……五五年になると収益の有利性が認められて三好町を中心に……栽培が盛んとなり、阿波葉衰退の平成時代でも黄色種は三好郡煙草全作付面積中、四二パーセントを占め、命脈を保っている。」（『阿波池田タバコ史』p.306）

買い取り価格が高いために阿波葉から転換した農家もいたが、そのためには乾燥設備を新たに導入する必要があった。そのため、機械を導入できた家のみが阿波葉から黄色種への転換を行った。葉タバコの栽培を終えた現在は、乾燥機は他の用途に使われている。

「阿波葉から黄色に変わったんが、昭和50年代。黄色になったらな、乾燥機で乾燥するようになってな。それまでは天日でしよった。」(J)
「ここらでは黄色種作ったひとはおらん。黄色種の場合はちょっと機械がいった。値段は（黄色種の方が）よかつたんだろうけどな、設備をようせなんだらうな。」(N)

「乾燥機、今お芋入れて貯蔵するのに使いよる。」(K)

刻みタバコが次第に紙巻きタバコに押されていったことや、専売公社の民営化(昭和60年)によって、この地域での葉タバコ栽培は衰退していった。その結果、葉タバコを中心とした農業のありかたが変わり、農業を辞めて働きに出る人も増え始めた。

「(三好郡の30～51年の)総人口の減少に比べ煙草耕作者数の減少はこれをはるかに上回り壊滅的である。」(前掲p.325)

聞き取り対象者も、そのほとんどが昭和50～60年代に葉タバコの栽培をやめている。ただし一部の者は平成に入ってからでも栽培を続け、平成16年まで継続していた。

「民営化になる前にやめたら奨励金が出て、だんだん減反していった。そのあとで若者が都会へ流出していった。」(A)

「昭和60年ぐらいに建設業が切り替わりで増えてきて昭和62年にやめた。」(F)

「平成2年に主人ができんようになってやめた。」(K)

葉タバコの衰退に対応し、野菜へと作目を転換したことにより農業を続けることに成功したと言えるのが、加茂山地域である。転換時に生産組合が組織され、特徴的な傘型ハウスでのトマト等の栽培が現在も続けられている。

「昭和43、4年に野菜を始めた。昭和60年、50年代の後半か、その頃には(タバコが)なかった。いっぺんに手のひら返すように変わるのではなく、だんだん入れ替わってきた。」(N)

4) ミツマタ(三極)

明治時代に広まった。焼畑で雑穀を栽培した後に植えられることが多かった。栽培の手間は葉タバコに比べて少なかった。近隣で協力して加工までの過程(蒸す～皮を剥ぐ)を行っていた。

「ミツマタはまあまあなお金になったんよ。」(D)

「山(焼畑)へ植えて。冬の間、葉タバコのオフシーズンにした。」(F)

「3年したら現金収入にすぐなる。次は2年したら採れる。」(G)



写真5 ミツマタの加工(昭和12年)。「子ども負うてるのがわしのばあさん」

5) 茶

阿波葉からの転換作物として栄えた地域もある。かつては畦や石積みの脇に植えられ各家でも作られていたが、家庭での製茶はほとんど行われなくなった。現在では、生産農家は加工賃を払って加工場へ持って行って製茶している。出荷販売している農家もいる。

「昔は生葉を鉄鍋で煎って筵の上でもんで、天日で乾かした。」(C)

「みんな畑の畦でお茶作ってた。メインの畑は（別の作物で）使っているから。」(A)

「茶業組合で製造してもらっていたが加工賃が上がって、最近は親戚や子どもには個人で製造しとるところで買うて送る。」(C)

「今はお茶のええとこだけを、短めに刈ってもらってお茶の葉っぱで買うてもらおう。」(C)

また現在、地域活性化をめざす地元若手経営者グループが茶畑の一部を借り、菓子などの商品化に取り組んでいる。

6) コンニャク

特につるぎ町一字で盛んに栽培されたが、次第に衰退した。芋のままや乾燥した粉の状態出荷するほか、自宅で加工して出荷することもあった。現在ではJA等に出荷されている。

「ほとんどの人が生で出荷していた。自分くのうちに加工する人もいた。」(H)

7) トマト

昭和40年代後半に、加茂山地域では葉タバコと入れ替わるようにしてトマトやキュウリの栽培が広まった。傾斜地でも設置が可能な傘型ハウスでの栽培が、地域の特徴となっている。加茂山地域では普及所等の奨励によって、他にタラの芽や山菜も栽培していた時期がある。



写真6 加茂山の傘型ハウス

8) キャベツ、白菜

葉タバコのオフシーズン、また葉タバコからの転換期にキャベツや白菜等の冬野菜が栽培されていた。しかし、買い取り価格は安定しなかった。

「白菜やキャベツも作った。たくさんできると値段が下がってあんまり売れなかった。すぐや

めたな。(F)」

9) 種取り用の野菜(カブ)、薬草

現在は薬草や種取り用の野菜を契約栽培で作っている農家が存在する。

(2) 傾斜地における農耕のシステムについて

1) 畑の使い方

にし阿波の山間集落では、限られた土地で効率よく農業を行うために様々な工夫が行われてきた。主食の確保がなにより重要であるため、麦を作っていた時代は畑のほぼ全面を麦に割り当てていた。

「麦作ってた頃はほぼ全面、麦だった。」(C)

「麦とか大切なのは一番ええとこで作りよった。」(H)

当時は換金作物である葉タバコの栽培も行っていたため、収入の確保と自給を両立するために2〜3毛作が行われた。葉タバコ→ソバ→麦、葉タバコ→麦、麦→芋、雑穀(アワ)→ソバ、ジャガイモ→ソバ、葉タバコ→冬野菜等、地域や時代によって異なるローテーションが選択されていた。

「タバコ収穫後にソバ、ソバ収穫後に麦(裸麦)、と三毛作、その繰り返しだった。」(G)

年間を通して畑の大部分を占めていた麦や葉タバコの栽培がなくなった現在は、野菜の二毛作、ソバと野菜の二毛作等へと変化している。

多毛作の際には、先に畑にある作物の畝間に次の種をまく(あるいは苗を植える)というやり方をとること等によって、限りある土地で効率よく作目の入れ替えを行っていた。カヤのすき込みなどの作業は、作物の入れ換えを考慮したタイミングで行われた。

「イモはな、麦の中に畝ひいて、植えよった。麦がある中へ芋植える。」(J)

「(麦を)刈らんうちに、麦の中植えよったん、タバコを。(麦を)大畝でまいとってな。その間へな。」(I)

「タバコが収穫終わったらそばや大豆、小豆を間へ植えて。収穫は反収にしたらずかですけど、やっぱ畑ちゅうんは十分使いよった。」(O)

連作をきらい作物の栽培は、畑の中で作目の配置を細かくローテーションすることで行っており、現在でもその方法をとる農家もある。

「昔からもうな、おんなじとこではええのはできんきにな、一年一年(植えるものを)替えて。一枚の畑で、作目を分けてしよった。」(M)

「順番に畑を替えていくんよ。(同じものを毎年作らないように)家の人(経験積んでいる人)が『ちょっと出来にくいけんほなこっちにまわすか』、って言うて。今も、そういう作りかた

しよんよ。」(J)

少量多品目の栽培は、にし阿波の農耕システムの特徴となっている。

葉タバコや主食用の麦を栽培していたときは、畑の大部分をそれらが占めていた。近年は高齢化によって畑そのものが縮小している場合もあるが、換金作物を作っていた時代より多種類の野菜を育てるようになってきている。畦や家・畑の周り、石積みの隙間などの小さな空間も有効に利用してお茶・果樹等が育てられ、今もそれらが残っている。

また農家民泊や農家レストランでは、提供する食事の食材をほとんど自給することが可能であり、少量多品目栽培の新たな価値も見出されている。

「この畑の中に 20 種類あるんですよ実は。20 種類あるってことは、一つがだめになったって一つが虫に食われたってなにかはぜったい食べれるきに。そういう農業をしてきたんですよ。」(F)

「全部が全部タバコはせんと、その合間にできるものを、少しは置いとく。野菜とか大豆作るとか、いろんなことをしよった。自分の面積においてな、みな、生活するのに作っていきよった。」(J)

「野菜は 20～30 品目ある。誰も（何種類かは）わからんな。（建築業をしていた時は）野菜は今ほどの種類は作ってなかった。昔はほとんどの畑でタバコ。」(A)



写真7 農家民泊の食事、食材はほぼすべて自家製の野菜

2) カヤの利用

乾燥したカヤを細かく刻んで畑にすき込む方法が昔から行われてきた。現在も多くの農家が効果を実感しており、その方法を継続している。

「カヤを入れると土が肥える、表面の土の流出を防ぐ。保湿もする。エコで環境にやさしい。昔の人は理にかなってる。」(A)

「畑に入れたらふわっとなってええんで」(G)

「化学肥料がでて（から）も、肥料の効き目がええ。」(H)

「（土上げの時、カヤが入っていることによって）土がな、たくさん（サラエに）かかる。」(H)

「カヤを入れなんだ畑はダメじゃわ、固うになってしまう。これ入れたら、やりこい。畑がやおい。」(I)

「カヤの一番の値打ちは土の流れるのを留めるこっちな。裸にしたらこの土地は全部流れるで。」(N)

また、すき込むこと以外のカヤの利用方法として、阿波葉等の栽培では、収穫時に何度も通る通路（畝間）にカヤを敷く（踏みつけた結果、秋には肥料になる）やり方が家によってはとられていた。畝間にカヤを敷くその習慣は今も残っている。

「阿波葉を作りよところは毎日毎日葉タバコとりにはかないかんきん、じゅるいからゆうて、そのまま（通り道に）入れよった。長いやつを、混ぜるんじゃなしに。みなそうしよったんで。今もうおらんけど。大麦とかでも、家によっては合間に入れて。入れん人もあるんよ。」(M)

「毎日のように通路に入っていくんよな、毎日管理したり収穫したりするけん。そこへ何にも敷かなんだらな、土が流れるしジユクジユクになるんよ、雨が降ったら。そこに敷き草をしくんよ。そうすると全然土がつかん。加茂山の人が通路にカヤ使いよったのはタバコの癖ちゃうで？それが（今も）残っとんじゃ。」(N)



写真 8,9 畝間にカヤを敷く

カヤのすき込みは、かつては堆肥を作り畑に入れるやり方が一般的だったが、現在はそのまま短く切ってすき込んだり、長いままで畑に入れたり、畝間に置く使い方だけになったりしている。また、高齢化にともなってカヤの利用が負担に感じられるようになってきている場合もある。

「(しんどいと) 今も思うとる。年がいくほどな。(カヤを入れるのが畑にとって) ええのは知っとるんじゃけど、体力が限界。」(H)

【カヤ場（採草地）】

かつての採草地は家から離れた山場にあったが、現在その多くは管理されなくなり森林に戻っている。現在は、耕作放棄地となったかつての畑が採草地として使われている。昔の風景からは大きく変化してしまっただが、総じて家や畑の近くでカヤを手に入れることができ、運ぶ手間は少なくなっただと捉えることもできる。

「日に3往復しかできないぐらい、往復2時間とか遠いところにカヤ場があった。近くは畑作らなきゃいけないから。」(D)

「昔は遠くのほうで刈りよった。今スギ植えとる見るとこ昔はカヤ場だった。」(G)

「このごろは畑荒らしたとこで刈りよんじゃ。(H)」

「元は畑だったところが今のカヤ場。もう、高齢化と後継者不足で。」(A)



写真10 現在のカヤ場、かつては畑だった

【カヤの運び方】

昔は背負子（比較的急な地域）・棒（比較的平らな地域）・「じゃんじゃん」（チリキ）・荷車などを使って運んでいた。

「運ぶのは山から山へ『じゃんじゃん』ゆうて線引いて、大きな草束を縄で縛って、線に引っかけてじゃーって向こうに行きつくん。そこから畑へは背負子で運んだ。男も女もない、肉体労働だった。」(C)

「じゃんじゃん、線引いてな、車ついとって、番線のちょっと大きいやつ。平成になるまではあったんじゃないかな、風呂に薪を使いよったきに。」(F)

「背負うてくるかじゃんじゃん。遠くで刈った人はじゃんじゃん。」(G)

「負うか、天秤棒で担いで。棒みな持とった。」(M)

「昔は車っちゅうんで下ろしてきたり。牛につけたりして、下ろしてきよったんです。荷車みたいな、人力車みたいな」(O)

今も背負子を使って運んでいる農家もいるが、多くは違う手段（運搬車や軽トラ等）で運ぶようになった。じゃんじゃんは平成に入る前頃まで使われたが、現在は多くが撤去されている。

「今はカヤは機械で刈って車で運んでる。」(C)

「負い台で負うんじゃ。負い子って。昔から運び方一緒じゃ。」(I)

【コエグロ】

コエグロは、昔と同じやり方で作っている農家もいれば、高齢化により作らなくなった農家もある。コエグロを作らず横に積む簡易的なやり方に変えた農家もある。

「今はコエグロにはしていない。技術がいるんですわ、昔のひとがしよったような私はようせん。技術というか熟練せなんだら。(昔の職人技のは) それはきれいなんですよ。(コエグロ作りは) したことあるんじゃないけどね、もう10年も15年もしたことないのう。(今は) コエを積んどんで、あとビニールで(覆って)。それがてっとり早いで。」(O)



写真11 カヤをコエグロにはせず、積んで乾燥させる

また、観光客に向けて作るようになったり、見た目がきれいになるように作ったりするなど、外からのまなざしを意識した変化もみられる。

「こないだは(お客さんのためにコエグロをきれいに見せるための)演出があった。去年残ったのに新しいの巻き付けたんよ。」(G)

「去年の秋、この下に1つだけした。昔は家々にしとったけど今はもう無理で、人に見てもらうように作るくらい。」(J)

3) 肥料・農薬

牛が各家庭で飼われていた時代には、牛糞と細かく切ったカヤを牛にふませ発酵させて作る堆肥が肥料として一般的に使われていた。

「牛にカヤをふませて、敷き草取り替えて積んで発酵させておく。半年ぐらいためておいて畑に入れる。」(A)

「草を刈って、自分のうちで堆肥を作りよった。牛が(排泄)して、そこで堆肥を作りよった。ある程度積もったらそれをのけて、また新規のカヤ入れたり、また牛にふませよった。今はもうそういう風にしとる人おらんけど」(M)

また、下肥もよく使われた。

「昔はトイレがぼっとんで、それを担いで畑に入れてた。桶で自分たちで運んで。人糞尿は水を入れて薄めて使う。」(A)

「昔はタバコにも、下肥ゆうんかかけよった。この辺のひとは皆30年代まではかけよった。」(G)

「人糞尿、終戦後はですよ。ためて、畑へまきよったわな。」(O)

次第に化学肥料が入ってくるようになってからは、特に米の収量が増加した。また、葉タバコを栽培していた時代は専売公社によって指定される専用の配合肥料を大量に投入していた。そのため同じ畑で次に栽培する作物には肥料の投入が必要なくなるほどだった。現在は葉タバコの栽培を行わなくなったため、大量の肥料を投入することはなくなった。

「タバコ3反作って、昔の50キロの肥料40俵も使うんでよ。肥料代だけでもかかるし。タバコのアとのソバはようできたわな、そんだけ肥料入れたら。」(F)

「肥料もそうだけど消毒がごっつい消毒しよったんよ」(F)

「タバコだけ専用の肥料。専売公社が手配してな。配合肥料やゆうてな。今でゆうたら油かすがようけ入ったわ。」(N)

現在は牛糞による堆肥作りは行われなくなり、下肥も使用しなくなった。カヤのすき込みの他に、購入した肥料（化成、有機質、牛糞等）を使っている農家も多い。化学肥料が手に入る現在も、安心のために無肥料・無農薬で栽培を行う農家もいる。

「お茶も無肥料無農薬。茶畑の下に敷いてるのはイモの蔓。腐ったら肥料になる。剪定した枝葉も敷いている。化学肥料は使わない」(A)

「今もなるべく薬は使わんやんな。虫も拾うたり。それが大変なんですよ。(手間掛けるのは) やっぱりな、安心。『おらんくのは薬しとらんのぞ!』っての。」(H)

「手間はかかるけど、(ソバの雑草は)手で取るんです。ほだけん無農薬じゃあれ。一切農薬せんけん、身体にはなんちゃんないわ。」(I)

4) 道具、機械

聞き取りでは、ヒトリビキ、サラエ、押し切り、唐竿などの伝統的な農具の使用について言及された。カヤや収穫物を運ぶ時には、傾斜の違いや地域の違いによって、背負子、棒、天秤棒、縄などの道具が使われていた。

「負いかご、縄で負いよった。なかつたら縄だけで負いよった。負い子ってあるけど、こっちは少ない。ほとんど棒。きつところは背負ったほうがいい」(M)

「天秤棒ちゆうてな、かたいで戻ってきよったんじゃ。運ぶときには、ソバとか、畑から全部かたいで。機械がないきん持ってこれんで」(M)



写真12 今は使わなくなった棒とフゴ

伝統的な農具を家で改良することもあった。

「ヒトリビキ、コマ（車輪）ついたのはちょっと楽だった。土に食い込むように重りがついて」(E)

機械が導入される前は牛を飼っており、牛に農具をひかせていた。

「昔は今の耕耘機やテラーっちゅうのがまだ使えんき、牛にね、鋤とか鋤のような（ひかせた）。ほとんどの家には和牛、黒い牛はおりました。昭和35年ぐらいから減ってきて。それから機械が入って来たりして」(O)
「牛に畑ひかしたときには、牛鞍っていう鞍があって。牛に置く」(O)

「牛がな、あの下急傾斜地ひくんぞよ。昔はな。もうほんなこのごろはせなんだえんどな。昔の年寄り連れていっきょったよ」(Iさんの妻)

昭和30年代には機械が導入され始めた。傾斜地でも機械の導入はある程度可能であったが、条件としては厳しいものであった。その後使うのをやめた場合もあるが、現在も機械を使用している場合が多い。

「傾斜じゃゆうときに、テラーまっすぐ行かんのですわ、斜めにこう行くんですわ。耕耘機は無理です。トラクターも無理。」(O)

「昭和36、7年か機械（耕耘機）最初に買うた。ソバは50aぐらい作りよったけど、ようせんわ。機械（トラクター）入らざったら。」(G)

「土上げ機、使うたこともあるんじゃけんぞな。二人かかるんじゃほれも。持っとかな。そんなのは、ちょっと使うてみたच्चゅうぐらいじゃわな。」(H)

「そばは今はもうな、運搬車ちゅうてね、これで運んで。今もカヤはこれで運ぶんよ。」(M)



写真13 今も使い続けている背負子



写真14 昔は棒を担いだが、今は運搬車で運ぶ

現在も伝統的な農具を使い続け、効率の良さを評価している農家もいる。

「唐竿、脱穀機より早いな」(A、B)

「カヤは今は刈り払い機で、昔は普通の鎌で手で刈る。手刈りの方がきれい、刈り払い機だと集める手間がかかる」(G)



写真 15,16 今も使っている伝統的な道具 (唐竿、サラエ)

その一方で、高齢になり昔ながらの農具を使用する作業が体力的に厳しいと感じる人もいる。

「土を上げるのが大変。(息子が) 耕耘機入れてくれる。土が下がるからあとは手作業で土上げ。昔は6本歯、今は力がないから4本歯のサラエで」(C)

「高齢者ばかりだからこれ(負い子)背負うのはしんどい」(C)

「一番大変な作業は、今は畝つくること。ヒトリビキ引っ張るの、力がなくなって」(K)

「サラエもあるんですけど、あれはとて、70代いったらきついですわ」(O)



写真 17 土上げの様子、今は4本歯のサラエを使う

伝統的な農具の使用を支える野鍛冶がかつては各地に存在していたが減少し、現在は1人になってしまった。その継承が危惧されている。

「(昔は) 鍛冶屋は屋間にいた。道具の歯の角度調整したり」(J)

「(サラエの手入れを) 鍛冶屋さんにしてもらうんよ、角度にあわせて。ここから40分も行ったとこじゃ。」(I)

5) 手間替え

労働交換である「手間替え」は様々な作業で行われてきた。その一部は昭和の後半になっても維持されていた。

「サラエで土上げ、毎年上げよった。昔は手間替えて、麦まきとか全部、12、3人集まって作業してた」(G)

「麦をまいたら大体その年の農業の作業は終わりなんよ。その時に一回全員で上げるんです。手間替えて。ずらーっと並びよったんですよ。昭和60年、昭和の後半には(まだ)あったと思う。」(N)

「茅葺きの屋根、今は葺き替えする人がいない。昔は互いの家を葺き替えした。」(A)

麦まき、土上げ、屋根の葺き替え等以外に、葉タバコ栽培時にも、雨天時の乾燥作業を協力して行う等、日常生活の中に手間替え的な要素は存在していた。

「タバコを外の庭のところに干して、雨が降ったら押し込めるようにしてあって。夕立でよそがまだしまってたなかったら、手伝いに行ってしまうてあげた。農作業も互いに手伝って。」(A)

かつて手間替えて行っていた作業は、現在は個々の農家で行うようになっている。高齢化でできない場合は家族や親戚、知人が手伝う。

「畑ひいたりするのは息子が帰ってきたときに(する)。みなにも手伝うてもろて」(K)

また、ソバや雑穀の収穫時に臨時で近隣の人を雇ったり、地元の小学生等と一緒にイベントとしておこなったりして、昔とは違う形で人手を集めた作業もみられる。

「ソバの収穫、近くのおばちゃん雇って10~20人で手刈りで」(G)

「(シルバー人材を)うちももう頼みよんじゃ。当然自分もやるけどな。」(H)

「(ソバ刈りで)子どもたちも一緒に収穫したんですよ。小学生とか。」(D)

(3) 食生活

1) 食品加工

かつては、各家庭で豆腐・醤油・味噌・コンニャク等の加工を行うことが一般的であった。今も作り続けている家庭もあるが、手間がかかること、また加工所や購入手段の存在によって作るのをやめている家庭も多い。

「昔は豆腐・コンニャク・味噌・醤油、家で作っていた」(A)

「コンニャクは、昔はこづかい稼ぎに加工して作って出荷してた。もうコンニャク作りせんわ、めんどうなん。」(C)

「今も作ってますよ味噌だけは。農協さんも麴は作ってくれるし。今は加工所もあったり、それを利用したりとか」(Oさんの妻)

2) 保存食・伝統食

山間部では、冬場に町へ降りていくことができなくなるため、保存食文化が発達していた。

「切り干しちゅうて、(イモを)羽釜で茹でて、乾燥させとく。そういうような時代がな。我々今も継続はしよるよ。今もしよるよまだ。」(M)

「干し芋作りは子どもの頃から、藁で吊るのはな。今とイモの種類が違うけどな、昔のは『ごこく』、崩れんぐらい固かった」(J)

「大根は干し大根にして。一年中食べたわ。今でもしますよ、切り干し大根。(丸干しじゃなくて)細うに切つて。」(Oさんの妻)



写真 18,19 昔ながらのやり方で干し芋を作っている

現在も同じ加工方法をとっている場合もあれば、少しやり方に変化がみられる場合もある。冬場も買い物に行くことが可能となったため、保存食が持つ意味合いも変わった。家庭で作られるほか、商品化したり産直に出荷するようになったりと、自給用から販売に目的が変化している。

伝統食についても、観光向け・商品化へと意味合いが変化しつつある。ソバ米は、雑炊やお寿司として食べられていたが、今はパック詰めした状態等で商品化もされている。

「昔からソバ米雑炊にしたり。お祭りとかな、ソバを寿司にしたり」(Iさんの妻)

「このマーク(世界農業遺産のマーク)もついたけんの今度。ブランドになったけんな。(パック詰めした)袋もな、カビたりせんような、袋にして」(Iさんの妻)



写真 20,21
商品化された干し芋とそば米

3) 食品の入手手段

昭和 30 年頃までは現金ではなく、麦やソバ等の収穫物と商品を物々交換する商店が存在し、これが食品を入手する手段となっていた。

「昭和 30 年頃まで物々交換だった。お金で取引するのではなく、麦とお菓子交換したり」(A)
「峠越えてな、売りに行って帰りに、食べ物とかな、いろんなもの交換して帰ってくる。」(D)
「ソバとか余ったら店持って行って交換して、味噌とか醤油とか米とか。この下に田中商店っていうのがあって、小豆持って行って交換したり」(G)

現在はそのような商店はもう存在しない。

収穫物は、JA等に出荷するほかに、親戚や子ども・孫、知人などに送るようになっていく。そのほとんどは見返りを求めるものではないが、互いに送り合うことで自分では手に入らない食材が届くこともある。

「今作った野菜は出荷しない。子ども、親戚、友だち。自分くで食べるのは知れとるんじゃけん。作ったもんな、みんな待ってくれよるけん。美馬市から貞光、この地域に（いる人に配る）。うまいわって喜んでな。そのかわり、何が来るかわからんじゃ、シシ肉が来るやら、ハマチが来るやらのう。米が来たり。ハッサクが来たり。ないものが来るけん。」(H)

商店のほかに食品を入手する手段として、商売人の存在があった。現在は商売人が集落を訪れるようなことはない。

「商売人も来よったし、我々子どものころは、鯨の肉とかな、ようけ売りに来てましたわ。人口昔は 8000 人ぐらいおったきんな。結構商売になりよったと思うよ。」(D)
「じゃこは昔からあったで、売りに来る行商のおばさんがおったんです。汽車で来て、背中に負うてずっと回りよったですよ。鰯のようなんからな、いり干し。それから贅沢なんは塩鯖ね、塩漬け。香川、徳島から来とった。お盆前やばよう来とった。」(O さんの妻)

(4) その他の生業の変化

1) 林業

炭焼きが行われている地域もあったが、現在は行われていない。東祖谷では昭和 30 年代に林業が増大した。国の方針に従って昭和 40~50 年代にスギやヒノキを植えた人も多いが、その多くは現在も伐採されることなくそのままになっている。

「(ひいおじいさんとかの時代は) 林業がまだ (あった)。木炭、薪、炭焼きも。この山一帯、冬になったら炭を焼くんよ。」(N)
「昔はスギの木が一本もなかった。全部焼き畑かコエ場か畑か。今あるスギの木は終戦後植えた。林業で生計立ててるひとはゼロだった。」(D)

「この奥にある国有林、原始林に材木が大量に残ってた。終戦後、それを切って出したりとか、働く場所ができてきたけんな。」(D)

「この前の山な、造林しとる木。植林をしたほうがええぞというんでな、思い切って若いときに、だーっと、自分で(造林した)」(M)

「林業は、昔アカマツがあった。上の方には残ってるけど、松喰い虫で(絶滅した)」(A)

「昭和52年ぐらいまでだったらスギ(植えても)、30年ぐらいしたら結構間伐してお金になったけど、そのあとは安くなって赤字になった。」(G)

2) 牛の飼育

黒牛を育て、1年後に新しい牛と交換する。農耕に使いつつ、堆肥づくりに利用しつつ肥育した。当時はほとんどの農家が1頭ずつ飼っていた。平成に入る頃まで飼った人もいるが、現在は飼育している農家はいない。

「牛は肉牛、一家庭に一頭いた。耕すのにも、堆肥にも使う」(A)

「牛も1頭飼よかった。雌の牛が生まれたらお金になる。一年に1頭ずつ生まれたら収入があるんじゃないけど、うまい具合に種付けができなかつたりして」(C)

「馬喰さんは小さい牛持ってきて大きいやつもっていく、その差額をもらう。交換するのは年に一回。岡山とか、徳島から」(G)

また、聞き取り対象の中では、加茂山地域でのみ乳牛の飼育が行われていた。牛乳は出荷しており、昭和35年ぐらいからは集荷にも来るようになったが、現在は行われていない。

「(昭和34年ぐらい)うちの家の場合は、乳牛飼よかった。最高5頭ぐらいは。牛のえさはカヤ、それから、藁、雑草ね。買ってくるってこともある、濃厚飼料でね。それに見合う利益があったと思います。そのときには牛乳や高かった。(牛乳を)下まで持って降りよったんですわ、肩へ担いで。昔は今のように車ないし。集荷は昭和35年ぐらいから。そのときは運んでくれる人ができたんだけど」(O)

3) 出稼ぎ(副業)、農外就労

生計を支えるために農閑期、また短期の出稼ぎに行くことが一般的であった。出稼ぎによって収入が得られるようになり、米を買うことができるようになるなど生活に変化が起こった。仕事内容は多岐にわたり、県内だけでなく高松や岡山、遠くは大阪や京都、九州にも出かけていった。

「お父さんが出稼ぎにも行った、岡山の方か。その間畑は、おじいさんおばあさんなかったけん私がみなしよった」(C)

「私らも遅うには、タバコやめてからは土方さん行ったけど」(F)

「出稼ぎに行くようになってから、お米が食べられるようになった。戦後20年ぐらいはみんな貧しかった」(J)

「女の人はミシンを使うてね、そういうところでなんしよった。男性は土木とかな。冬場に働きに行きよった。3月、4月になったらまた葉タバコ植えないかんなんとか忙しいけん、帰ってきてな。また家の手伝いしよったんよ。そういう繰り返し繰り返しやった。」(M)

「男の人は岡山の方へ出稼ぎちゅうんか、い草を刈りに行ったり、田んぼの植え付けやも行きよったですわ、今のように機械なかつたきん。トンネル掘るのも。」(O)

「タバコの生育期間の間は出稼ぎに行くんです。出稼ぎというか、ここらあたりの、地方の、工場とか、土建屋さん。それから林業もまだ。それで補いよった。(N)」

出稼ぎという形ではなく、家を離れて就職する機会もあった。

「私京都におったんで。就職して、食堂の方でおったんよ。こっちからようけいっとったんよ。こっちの人が専務さんだつたきんな。おもしろかった、寮生活してな。銭湯へ行ったり帰りにラーメン食べたりな。一番楽しかったわ。」(Mさんのご家族)

次第に、農業による収入が十分に得られないこと、農業より条件のよい就業機会が増えたこと等から「出稼ぎ」という形態から離農していく流れが生じた。

特に葉タバコの衰退に伴って、農業から離れる人が増加した。現在専業農家である聞き取り対象者でも、かつては農業以外の職業に就いていたり、兼業農家だった人が多くみられた。

「だんだん(葉タバコを)減反して行って、そのあとで若者が都会へ流出していった。はじめは季節労働から、本格的に働きに行って戻ってこないように」(A)

「農業では食べて行けんようになったからここで建設業をした。徳島や高松に通ったりして。そのときは農業はそんなにやってなかった。」(A)

「40年代になったら土木が盛んになった。そっちに流れて農業が廃った、そっちの方が現金収入になるで」(G)

「我々の世代は兼業農家じゃ。収入としては農業じゃない兼業の方がメイン」(G)

「農業でな、ひとりでは食べれんのよ。一人で作る農業って知れとるじゃろ、傾斜地は特に。どうしてもみな勤めの方になった。勤め先はほとんど、この三好郡内じゃな。私らも勤めのほう出たけん。その頃かな、勤めの人と農業との収入の差が出てきだしたんよ。」(N)

「この農業っていうのはだいたい半年なんよ、お金が入ってくるのは。収入が0の月が何ヶ月もある。やっぱそれではな、本来の生活はできんのよ。」(N)

「露地の百姓が一番怖いのは災害なんよな。大きな台風。もう、その時期にやられたら一銭も、全部だめ。その辺も差が出てくる、勤め人とな。」(N)

4. 小括

世界農業遺産に認定されたにし阿波の傾斜地農耕システムが、どのように受け継がれてきたのかという観点から、改めて調査結果のポイントをまとめておく。

まず、農作物に関して、昔から受け継がれてきたという点で注目すべきは雑穀の存在である。地域によっては焼畑で栽培されており、焼畑のなくなった現在でも、特にソバについては多くの農家が自家採種を続けている。その他の雑穀については、米が入手できるようになったことや獣害のために栽培をやめてしまった農家も多いが、その代わりに現在では、祖谷雑穀生産組合が昔からの貴

重な遺伝資源を保存する役割を担っている。

農作物で他に特徴的であったのは葉タバコである。江戸時代に広まった阿波葉は換金作物として、その全盛期にはほとんどの農家で栽培され、生計を支えてきた。重労働であること、大量の肥料が必要であること、収入を得るのが収納の時だけであることなどのマイナス要素もあれば、買い取り価格の安定のために葉タバコは地域に受け入れられてきたのである。

やがて専売公社の民営化に伴って栽培が衰退したことと就業機会の増加により、葉タバコだけでなく農業そのものからも離れる人が増えていった。それでも兼業や作目の転換などを行いながら農業を続けてきた者も多く、そういった人々の手によって今日みられる農耕システムが残されてきたのである。

傾斜地農耕システムにおいては、限られた土地を有効に使わなくてはならない。そのため、主食作物や換金作物を中心にして畑を利用すること、多毛作を行うこと、効率よく作物の入れ替えをするために畝間を広くとること、そしてにし阿波傾斜地農耕システムの特徴にもなっている少量多品目栽培を行うこと等の工夫がなされてきた。そのような工夫の一部は現在も残り続けている。

さらに特徴的なのはカヤの利用である。多くの農家がカヤの利用は有効であると強く感じており、化学肥料が利用可能であるにも関わらず、現在でもカヤを刈り乾燥させ畑に入れる農法を実践している。人口減少や高齢化に伴い、カヤ場（採草地）の場所が山場から耕作放棄地に移り、カヤを運ぶ際に機械が使用されるようになり、コエグロの作り方や畑への投入法が変わるなどの変化はあるものの、カヤの利用そのものは現在でも傾斜地農耕システムに欠かせないものとして認識されている。

道具については多くの場所で伝統的な農具が使い続けられているが、農具のメンテナンスを行う野鍛冶がにし阿波で1人だけになってしまったために、その存続が危惧されている。また、高齢になり昔と同じ農具を使用し続けることに困難さを感じている人もいる。

労働交換である手間替えについては、かつては様々な場面で行われてきたが、現在はあまり行われなくなっている。人手のいる作業は親戚・近隣住民が手伝うほか、雇用をいれたり、イベント形式でおこなったりするようになっている。

食生活については、かつて家庭でされていた豆腐・味噌・醤油・コンニャク作りを、現在ではやめている場合が多い。かつては自給用であった干し芋等の加工品や保存食は、現在では販売されるようになり、伝統食についても同様に商品化がなされ、地域外の人をも対象にするようになったことで、その意味合いが変化している。食品の物々交換を行っていた商店や商売人は、今ではみられなくなった。

その他の生業では、多くの家で牛の飼育がなされていた。牛は農耕だけでなく堆肥作りの面からも重要な存在であった。乳牛を飼育し牛乳を出荷していた地域もあったが、いずれの場合も牛の飼育は現在行われなくなっている。また、農業を行うかたわら出稼ぎに行くという形態も一般的であった。出稼ぎの先は幅広く、仕事内容も様々であり、葉タバコ等の農作業のオフシーズンに外へ働きに行く形式が多かったが、次第に農業以外の就業機会が増加したことで、出稼ぎから農外就労へと変化していった。

5. おわりに

これまで述べてきたように、「にし阿波傾斜地農耕システム」の現在の状況は、古い時代からの伝統的なやり方がそっくりそのまま維持されてきたのではなく、戦後日本の激しい時代変化を背景にしながら、地元住民による生計を維持するための取り組みの積み重ねによって出来上がってきたことが明らかとなった。とりわけ昭和中期までの葉タバコ栽培は、この地域の農業経営にとって大きな地位を占めており、そこでの肥料多投型の農法や中央集権的な販売管理体制は、伝統的かつ自律的な地域農業の姿とは異質な形態であった点は重要である。そしてこの葉タバコ栽培が専売公社の民営化によって退行することで、結果的に現在のスタイルが生まれることになった。

したがって、やや無遠慮な表現を許してもらえば、この地域の農耕システムは、「残そうとして残してきた」というよりも、「たまたま（このような形で）残った」という側面が強い。ただしこのことは、決して否定的に捉えられるべきではないと本研究では考える。

聞き取りを行ったある人物から「この場所は世界農業遺産なのか？」と逆に尋ねられたことに示されているように、地元住民の世界農業遺産に対する理解度や熱意には、人によって温度差があることも確かである。自分達の農業スタイルをありふれたものとして捉えてしまうことで、そこに特別な意義があることに気付いていない人々も少なからず存在するようである。

これに対して、にし阿波に大いなる価値と可能性を見いだしているのはむしろ地域外の者である。たとえばFAOで世界農業遺産の審査に携わっているアン・マクドナルド氏は、徳島での講演において、「にし阿波傾斜地農耕システム」について「一流の農業遺産」「非常に貴重な農法システム」であると褒め称えている（2018年5月12日）。彼女はその理由をはっきりとは明言していないものの、講演で登場した「環境保全型農業」や「生物多様性」といったキーワードから伺えることは、にし阿波で実践されている農法が、持続性、物質循環、生態系、環境負荷といった点で、世界レベルの高い意義をもっているという事実である。これを本研究の関心に沿って表現するならば、エシカル性の高い生業・生活体系が保全されていると言い換えることもできよう。たとえばコエグロの利用を中心に据えた栽培体系は低投入・資源循環型農法のお手本と言って良く、後世に残すべき価値を高く認めることができる。にし阿波では、葉タバコ栽培の退場によって結果的に環境保全型の農耕システムが形成され（残され）、その結果として現在、エシカルな未来社会を先導する可能性を手にしつつあるのである。

したがって今後に必要なことは、まずにし阿波の農耕システムに内在するエシカル的要素を、コエグロ以外の事例についても詳細に解明していくことであり、次にこれらがにし阿波を超えてグローバルな価値を持つという事実を住民に理解してもらうことである。この2点をうまく噛み合わせることによって、現行の農耕システムを積極的に維持しようとする機運を住民の間に生み出し、外部からのサポート活動呼び込む力へと繋がっていくものと思われる。にし阿波傾斜地農耕システムを「守る」という姿勢ではなく、「価値を掘り起こす」「価値に気づく」「価値をシェアする」という姿勢こそが重要となろう。

【文献】

阿波池田たばこ史編集委員会（編）『阿波池田たばこ史』池田町教育委員会、1992年。